

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

仏教天文学説の起源と変容

Origins and Transformations of Buddhist Astronomical Doctrines

## 2. 研究代表者氏名

小林 博行

KOBAYASHI Hiroyuki

## 3. 研究期間

2021年4月-2024年3月(1年目)

## 4. 研究目的

本研究は、仏教経典に見られる広い意味での天文学にかかわる諸説を検討し、その多様な起源と変容を明らかにする。仏教経典の中には、宇宙の構造、太陽と月の運行、暦法、占星術などについての諸説を掲載するものがある。これらはもともと成立時期も背景もさまざまであったが、さらにインドから中国へ、そして朝鮮、日本へと伝わる過程で各地の文化や社会に適応しつつ、大きく変容していった。

その具体的プロセスを明らかにするために、本研究ではとくに19世紀日本で提唱された「梵暦」に着目し、そこに取り上げられた諸学説の起源と変容の解明を試みる。「梵暦」の推進者たちは、多くの経典から関連諸説を集めて、須弥山を中心とする仏教的世界像の再構築を目指した。それら関連諸説の相違や重複に注目しつつ、その由来を検討することで、長期間にわたる広範な文化伝播現象をとらえ、さらには「梵暦」自身を批判的に乗り越えることを目指す。

In this research, we examine astronomical doctrines found in Buddhist sutras in order to elucidate their multiple origins and transformations. Some Buddhist sutras are known to contain various theories concerning cosmic structure, solar and lunar motions, calendar systems, astrology, etc. Originally formulated in different times and circumstances, these teachings underwent substantial transformations, adapting to local cultures and societies in the process of diffusion from India to China, then to Korea and Japan.

To trace their actual processes, we focus on the "Bonreki", a Buddhist astronomical campaign advocated in 19th century Japan, and attempt to shed light on origins and transformations of doctrines exploited thereby. "Bonreki" proponents garnered information from many sutras to reconstruct the Buddhist

universe with Mount Sumeru at its center. By examining the provenance of doctrines while paying due attention to their discrepancies and redundancies, we aim to gain an understanding of a long and broad-ranging series of cultural transmissions and to critically surpass the “Bonreki” itself.

#### 5. 本年度の研究実施状況

今年度は研究班の発足当初から、感染症拡大のためオンラインでの共同研究会開催を余儀なくされるなど、当初の研究計画を大幅に変更して活動を行った。こうした計画の変更はあったものの、オンラインでの宿曜経研究会と、個々の班員による読解、資料調査を着実にすすめることができた。それにより、『宿曜経』の成立と翻訳の文化的背景、現存写本のテキスト異同と書写系統などについて重点的に検討し、共同研究会においてその成果に関する討議をおこなった。また、本研究班の目標の一つに掲げている『仏国暦象編』訳稿の作成についても、巻1のすべてと巻2の大半の訳稿を集約し、整理を進めた。次年度以降、残りの巻の訳稿の検討・編集へと進む予定である。加えて、研究班予算で『宿曜経』『仏国暦象編』の諸版本や『暦象考成』の写本を購入し、今後の研究・訳稿作成に必要な史料を備えた。

#### 6. 本年度の研究実施内容

- 2021-04-26 宿曜経研究会 研究班の今後の方針等について 発表者 小林博行  
2021-06-28 宿曜経研究会 『宿曜経』巻上 28b07～31a08 発表者 白雲飛  
2021-07-26 宿曜経研究会 『宿曜経』巻上 31b09～大尾 発表者 清水浩子  
2021-09-27 宿曜経研究会 『宿曜経』巻下 01a01～05a04 西国每一月分白黒両分… 発表者 小林博行  
2021-10-25 宿曜経研究会 『宿曜経』の読み方 発表者 矢野道雄  
2021-11-22 宿曜経研究会 『宿曜経』巻下 05a05～07b04 二十七宿十二宮図 発表者 平岡隆二  
2021-12-27 宿曜経研究会 『宿曜経』巻下 07b05～10a04 二十七宿所為吉凶暦（昴宿～） 発表者 梅林誠爾  
2022-01-24 宿曜経研究会 『宿曜経』巻下 10a05～12a06 二十七宿所為吉凶暦（房宿～） 発表者 高井たかね  
2022-02-21 宿曜経研究会 『宿曜経』下巻 12a07～14b09 畢翼斗壁此四… 発表者 宮紀子

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

平岡隆二、高井たかね、宮紀子、武田時昌

学内

檜山智美(白眉センター)

学外

小林博行(中部大学人文学部)、高橋あやの(関西大学)、橋本敬造(関西大学)、矢野道雄(京都産業大学)、宮島一彦(中之島科学研究所)、清水浩子(大正大学)、白雲飛(大阪府立大学)、梅林誠爾(熊本県立大学)、三村太郎(東京大学大学院・総合文化研究科)、梅田千尋(京都女子大学文学部)、Bill Mak(ニーダム研究所)、Jeffrey Kotyk(ブリティッシュコロロンビア大学)、Daniel Monteiro(パリ大学)、吉村美香(愛知淑徳大学)、新居洋子(大東文化大学)、豊田裕章(大阪大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(0)	(0)	(0)	(0)		(0)	(0)	(0)	(0)
学内(法人内)	2	5		1			37		6		
		(3)		(1)			(24)		(6)		
国立大学	2	2					16				
		(0)					(0)				
公立大学	2	2					18				
		(1)					(9)				
私立大学	7	8					52				
		(6)					(25)				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関	3	3	3	2	2	1	8	8	6	6	3
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他 ※	1	1					8				
		(0)					(0)				
計	17	21	3	3	2	1	139	8	12	6	3
		(10)	(0)	(1)	(0)	(0)	(58)	(0)	(6)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	5		1	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	14		2	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	1		1	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		1	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
密教図像	5	R3. 12	クチャ(亀茲)国の早期の説一切有部系仏教寺院の復元的考察	檜山智美
Overlapping Cosmologies in Asia	10	R4. 2	Overlapping Heavens in the Mural Paintings of Mogao Cave 285 in Dunhuang - An Art-Historical Study of the Syncretistic Images on its West Wall and Ceiling	Satomi Hiyama
宗教遺産テキスト学の創成	40	R4. 3	西魏時代の敦煌莫高窟に見られる習合的図像表現について—第二四九・二八五窟の壁画に見られる「ハイブリッド・イメージ」について	檜山智美

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
<i>Traces of the Sarvāstivāda Buddhism in the Early Monasteries of Kucha</i>	1	R4. 1	*共著	<u>Giuseppe Vignato</u> & Satomi Hiyama, with Appendices by <u>Petra Kieffer-Pülz</u> & <u>Yoko Taniguchi</u>
アジア遊学 256 元朝の歴史	1	R3. 5	「知」の混一と出版事業	宮紀子
科学史事典	1	R3. 5	イスラームの科学（アラビアも含む）	三村太郎
よくわかる 現代科学技術史・S T S	1	R4. 2	科学史における文明論	三村太郎
上智アジア学	1	R4. 3	Greek Scientific and Philosophical Knowledge as a Survival Tool for a Religious Minority at the Abbasid Court: The Case of Thābit ibn Qurra	Mimura Taro
山田慶兒著作集第6巻	1	R3. 11	解題	小林博行
東アジアの王権と秩序	1	R3. 10	唐大明宮の中枢部の変則的構造とその離宮的性格との関わりについて	豊田裕章

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
熊本近代史 研究会会報 第 600 号	17	R3. 12	佐田介石の熊本藩政府への嘆 願書「御内意奉歎願覚」の評 価——春名徹氏新著『文明開 化に抵抗した男 佐田介石』 に触れて——	梅林誠爾
人文社会論 叢第 1 号	1	R4. 3	京都大学人文科学研究所所蔵 『天地瑞祥志』第廿翻刻・校 注(上)	清水浩 子・洲脇 武志
術数学研究 の課題と方 法	1	R. 4. 3	漢代における術数と天文学的 宇宙論	高橋あや の
科学史事典	1	R3. 5	江戸の天文暦学：西洋天文学 知の多様な自己化	平岡隆二
洋学史研究 事典	1	R3. 9	沢野忠庵、ビュルゲル、西学 書、坤輿万国全図、長崎游学	平岡隆二
Overlapping Cosmologies in Asia	10	R4. 1	Deciphering Aristotle with Chinese Medical Cosmology: Nanban Unkiron and the Reception of Jesuit Cosmology in Early Modern Japan	Hiraoka Ryuji
〈稿本・大 名家本〉伊 能図研究図 録	1	R4. 3	長崎歴史文化博物館収蔵「伊 能図」	平岡隆二
キリシタン 語学入門	1	R4. 3	東西コスモロジーの出会いと キリシタン文献	平岡隆二
日本医史学 雑誌	1	R3. 9	韓流医療ドラマ「馬医」のも う一人のモデル任彦国	吉村美香
日本医史学 雑誌	1	R4. 3	朝鮮の医書『東医宝鑑』につ いて	吉村美香
Overlapping Cosmologies in Asia	10	R4. 1	*共編	Bill Mak

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

感染症拡大により、当初予定していた旅費の執行が困難となったため、その予算を今後の研究・訳稿作成に必要な重要史料の購入に充てた（『宿曜経』版本、『仏国曆象編』版本、『曆象考成』写本、等）。それらは今後の共同研究会での読解・討議や、班員の個人研究などに最大限活用してゆく予定である。

12. 次年度の研究実施計画

次年度も計画通り、1) 宿曜経研究会、2) 『仏国曆象編』訳稿作成、にまつわる共同研究会を定期的で開催し、班員らによる発表・討議を行ってゆく。これらのテキストの読解・分析により、仏教を通してインドと中国の天文曆学、宇宙論、占星術がどのように交錯し、またそれが日本に到達してどのような学問的伝統を築き上げたかの分析・解明を進めてゆく。また本研究班があつかう史料やテーマを専門とする特別講師を招いた報告会も随時企画し、次年度は金子貴昭氏（立命館大学）による『宿曜経』版本にまつわる報告を予定している。そのほか、班員の研究発表を通して、近世後期から近代初期に大いに発達した梵曆運動の諸相について考察を試み、その源流と発展の具体的様相を探る。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	10		620000
	一般旅費			50000
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				50000
消耗品等経費				10000
その他				20000
合計				750000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

『宿曜経』については、次年度内に下巻を読み終える予定であり、その成果は班員による論文などの形で随時発表してゆく。また『仏国曆象編』訳稿作成については、班員同士のワーキンググループグループを組織するなどして、将来の出版に向けた編集作業を着実に進めてゆく。全5巻の訳稿の集約・編集にはまだ相応の時間を要するが、その過程で得られた成果は、個々の論文等の形で随時公開・発表してゆく予定である。